研医会図書館　科学技術週間　展示会

2019 年 4 月 15 日～19 日

長崎に関わる本

１～１０の解説

相川忠臣　長崎大学名誉教授

１．『牛痘小考』　楢林宗建：著　得生軒蔵　1 冊。1849 年

1847 年、佐賀藩鍋島直正公は牛痘をバタヴィアから取り寄せるように、藩医で出島の医師でもある楢林宗建を介して商館長レフィスゾーンに依頼させた。病気がちなレフィスゾーンは医師の不在に音をあげていたので給料を二人分にして医師を招こうとした。これに応えて 1848 年、オットー・モーニッケが牛痘苗をもって出島に赴任した。天然痘は子を持つ親にとり、恐ろしい病気であった。乳児の口内、咽頭まで痘が波及すると哺乳できなくなり、乳児死亡率は 5 割を超えた。生き残ってもあばた（かさぶたの跡）のために見目麗しさを失なった。

モーニッケが 1848 年到来時にもたらした牛痘漿は、長い航海で失活し、接種しても萌生しなかった。宗建は人痘の場合、痘痂（かさぶた）を用いれば数か月たっても萌生するので、牛痘苗も痘痂で運ぶように提案した。1849 年には牛痘漿以外に、蘭領インド軍ボッシュ医務局長が自分の子供から採取した痘痂も送られてきた。モーニッケはその痘痂を溶いた液を 3 人の子供に、ランセットを用いて右腕に、ランセットを使わず発泡を利用して左腕にそれぞれ接種した。3 人の内、宗建の子建三郎の右腕にのみ美痘が萌生した。その痘漿を 3 児の腕に植え継ぎ、全て萌生、ついで子供の腕から腕へと植え継がれていった。

モーニッケは江戸町蘭通詞会所を定期的に訪れ、医師たちに種痘の方法を伝授し、医師たちが連れてきた子供たちに接種して日本国中に広めようとした。楢林宗建は、藩主鍋島直正公に牛痘導入の成功を報告した。直正公は牛痘を世継ぎの淳一郎君の腕に植えさせ範を示したので、佐賀藩で種痘が広まった。あばたのあった直正公は彼の子女を罹患させたくない思いが強かった。江戸の貢姫にも種痘させたことがきっかけとなり、モーニッケ痘苗は関東、東北、北海道にまで広がった。『牛痘小考』は急速な種痘の全国普及に大いに貢献した。

２．『済生備考』杉田成卿纂述、天真捜蔵版、2 冊。1850 年

オットー・モーニッケは牛痘の普及に成功し、呼吸器と循環器の診断を可能にした聴診器をもたらした日本近代医学のさきがけである。さらに楢林宗建の「磨尼欽（モーニッケ）對談録」にあるように、クロロホルム吸入法による無痛外科手術の情報も伝えている。このようなモーニッケのもたらした西洋近代医学の新たな発展の内容は『済生備考』により全国に浸透した。“麻酔”という言葉は『済生備考』に始まる。長崎からの情報源は蘭通詞品川梅村である。彼は杉田成卿にモーニッケの聴診器を模造して贈っている。その際モーニッケの聴胸器用法畧説も添えたと思われる。
第一巻の内容は、
１．牛痘畧記。『モスト医事韻府、Most, Georg. Friedr., *Encylopedisch woordenboek der practische genees-, heel- en verloskunde.* Amsterdam 1838』から、牛痘についての解説を翻訳している。
２．モーニッケが 1848 年 1 月 15 日に記した聴胸器用法畧説の翻訳と品川梅村が模造して成卿に贈った聴診器（聴胸器）についての詳細な構造の説明である。
第二巻の内容は.
亜的耳（エーテル）吸法試説と吸硫酸亜的耳之装置（五図）からなる。その原典は「シュレジンゲル著、サルロイス蘭訳：硫酸（硫黄）エーテルの吸入法が人と動物に及ぼす影響について：Schlesinger, J.**,** *Over den invloed der inademing van den zwavel-aether op menschen en dieren*. Naar 2e Hoogd. uitg. verm. door J. Sarluis. ’s-Gravenhage 1847」である。エーテルの製法は簡単である。硫酸により 2 分子のエチルアルコールが脱水縮合する

とジエチルエーテル(エーテル)となる。従って化学構造に硫黄 zwavel を含まないが、硫酸エーテルという訳語を用いている。エーテル吸入装置図は原典からの転載である。

３.『七新薬』　司馬凌海：著、文久 2 年刊。尚新堂蔵。3 冊。

４.『朋百氏薬論』　蘭、朋百（ポンペ）：著。司馬凌海：譯並注證、明治 2 年刊。文苑閣蔵。2 冊

ポンペの薬物学講義録と『七新薬』

日本近代医学教育の父Ｊ．Ｌ．Ｃ．ポンペ・ファン・メールデルフォールトは講義内容の正確な伝達に配慮し、定評のあるオランダ語教科書から重要部分を抜粋して講義のためのノートを作成し、それに基づいて講義をしている。講義終了後そのノートを弟子たちが手分けして翻訳し、書写されてポンペの各科の日本語講義録が広まった。ポンペの教えた日本初の近代薬物学講義の翻訳は、松本良順の命により司馬凌海が担当した。通論 1 巻と各論 5 巻からなる「薬物学」は江戸の西洋医学所でも使用された。

凌海はこれとは別にポンペの講義内容に自分自身の注を加えて、当時大量に輸入されていた梅毒治療剤ヨードカリウムと解熱剤キニーネをはじめとして、硝酸銀、酒石酸（吐酒石)、駆虫薬サントニン、麻酔薬モルヒネ、滋養剤肝油についての『七新薬』を文久 2 年（1862）に出版し、広く読まれた。ポンペの怒りをかったのか『七新薬』の出版前文久元年に、司馬凌海は松本良順の門人録、登籍人名小記から有罪除籍されている（後復籍)。しかし『七新薬』は最終的に 1862 年、関寛斎の校閲を受けて出版され、ポンペ自身も『簡約薬物学提要、Pompe van Meerdervoort, J. L. C., *Beknopte handleiding tot de geneesmiddelleer,* Desima, ter Nederlandsche Drukkerij, 1862』を出島出版所から出版している。各科目のオランダ語講義録中唯一つの出版である。『七新薬』はポンペ自身が講義録を出版するきっかけとなった因縁の書である。司馬凌海は明治二年（1969）になって『朋百氏薬論』2 巻をポンペの『簡約薬物学提要』の総論のみを翻訳し注證を加えて出版した。慶応元年の日付のある序に松本良順の命によりポンペの薬物学は司馬凌海の担当となった経緯が書かれている。各論部分は『簡約薬物学提要』の翻訳ではなく、明治 2 年、『朋百氏薬性論(学)』2 巻としてポンペの「薬物学」講義

録の各論からの抜粋に注證をつけて出版された。

５.「甫謨百先生原病論」（ポンペ病理学総論）、江戸末書写、3 冊

ポンペの病理学総論(Algemeene ziektekunde)オランダ語講義ノートから、その主要な原典は神経生理学者ブートケの『生理学に基づく病理学総論、Budge, Jul., *Algemeene pathologie, gegrond op physiologie.* Uit het Hoogd. vert. door A. G. van der Hout en J. J. Souter. Utrecht enz. 1846』であった。ノートの翻訳である原病（総）論は、「１．誘動篇（体中各部交感）、２．病徴論（運動・行血器、呼吸器、滋養器、泌尿器、蕃殖器、覚知・感触・意思之疾患）。３．養衛分泌の病的変化を論ず。４．身体及其諸器械の異形を論ず。５．外因の失常の病原となるを論ず。６．体中機運の変じて病因たるものを論ず。７．産業と病籍。8．居所による。９．八質各箇性。１０．疾病蔓延及び経過を論ず。」からなる。ポンペの病理学総論は、生理学及び化学と病理学の境界領域、新しく発展した病態生理学と病理化学の内容を含んでいる。

1). 生理学の講義で新興の神経生理学を教えていなかったポンペにとり、ブートケの教科書冒頭にある誘動篇は神経生理学を補いたい彼の意図にかなっていた。

2). 病徴論の覚知・感触・意思之疾患で詳細な神経系の病態が教えられ、充実した神経系の病態生理学となるように配慮されている。

3). 養衛及分泌の病的変化を論ず”の章には血液成分の病的変化、“排泄物の変化を論ず”の章に尿成分の変化についての病理化学的内容が述べられている。ポンペは 1862 年帰国直前に内科臨床講義を終了するにあたリ、病理化学の内容を基礎に、必要な検査項目を網羅して整えた近代臨床検査学講義をしており、医師たちが病気を診断するために有益であったと推察される。

4). 5 から 10 の内容は現在の衛生学に近い内容である。実際に非衛生的なゴミ集積場や溝等の現場を見学させるなど、ポンペは衛生学に力を入れている。日本人がおこなうべき、肉食、牛乳の導入といった食生活改善と、風土に合った暮らし方を具体的に教えていたと思われる。弟子の松本良順や緒方惟準は肉食、牛乳の導入とその定着に尽力している。良順は『養生法』1864 で日本人の食事改善や暮らしのあり方を詳述している。養生所建設にあたってはポンペの指示通りに換気に特別な配慮をし、病院食

に肉食を導入した。明治維新後、良順の建てた早稲田の蘭疇医院では牛乳が提供された。

６．ウンデルリヒ著、病理学各論・治療学提要　**Wunderlich, C. A., *Handleiding in de studie der bijzonder ziekte- en genezingsleer.* Utrecht, 1859.**

ボードインの臓器別内科学講義の原典の一つ

ボードイン（A.F. Bauduin）はポンペ・ファン・メールデルフォールトの跡を継ぎ１８６２年から１８６６年まで長崎養生所（後に精得館と改名）で教えた。彼は、ユトレヒト陸軍軍医学校で１５年間教え、その間に生理学教科書を執筆、外科手術学や検眼鏡の手引きなどの専門書を翻訳した練達の教官であった。自然科学に立脚した近代医学の大要はポンペによって教えられたが、ボードインは検眼鏡後、網膜疾患が明らかとなった近代眼科学、新しく誕生した神経生理学、膀胱鏡、子宮鏡や染色技術によって発展した腎泌尿器学と婦人科学を長崎、大阪、東京で教えた。

ボードインの内科学講義は臓器別であることに特徴がある。『抱氏病理内科各論』あるいは『抱氏内科各論』として流布している。１．呼吸諸病と２．心臓大血管はニーマイエルによる。２の内容にさらに日本に多い脚気（脚気心）を加えている。 ３．消化器諸患、４．肝、脾、膵、腹膜、５．泌尿器、６．男性生殖器、女性生殖器、乳房疾患、７．血液諸病と中毒諸病、８．急性皮膚病　９．血液変調病（黄疸と尿毒症）、皮膚病．１０．神経系はウンデルリヒによっている。

慶応２年（１８６６）８月まで１年８カ月長崎でボードインに学んだ橋本綱常によれば、ボードインの内科の講義は Niemeyer 第一版によるという。ドイツ語４版を蘭訳したオランダ語初版 Felix Niemeyer の Leerboek der bijzondere pathologie en therapie であろう。ニーマイエルの書は徹底した臓器別の内科学である。オランダ語初版は４冊、１８６０年と１８６３年に出版されている。一巻の１は呼吸器、心臓大血管、一巻の２は消化器、肝臓, 胆管、脾臓の内容である。 二巻の一は、泌尿器、生殖器、二巻の２は神経系、皮膚、運動器、体質性疾患（感染症、栄養障害）の内容である。ボード

インの内科学の内容とニーマイエルのドイツ語版５版（１８６３）と比較検討すると、呼吸器、心臓大血管のみがニーマイエルと一致した。ボードインが１８６２年に赴任したときニーマイエル既刊の巻のみを持参し、１８６３年発行の巻の本邦舶載はかなり遅れた可能性がある。疾病の基本形、組織病理と臓器別疾患からなるウンデルリヒ C. A. Wunderlich の内科書 Handleiding in de studie der bijzondere ziekte- en genezingsleer を調べるとボードインの臓器別疾患の多くがウンデルリヒによるものであった。ドイツ語版の蘭訳本の出版は１８５９年であり、１８６１年本邦に舶載され、長崎留学中の佐藤尚中が喀血篇、チフス篇を翻訳している。ポンペも１８６０年初頭から始まり１８６１年１０月頃までに終了した内科学講義に一部引用した可能性がある。ウンデルリヒの書は局所性、全身性病変の基本形に始まり、組織病理に、細胞・結合組織・膜の疾病、皮膚病、筋・骨・軟骨、血管リンパ系、神経組織があり、臓器別の疾患各論に神経系、頭・顔の皮膚、呼吸、心臓大血管、消化器、肝脾膵腹膜、泌尿器、生殖器があり、体質性疾患に血液諸病、中毒、急性伝染病が含まれている。

抱氏病理内科各論８巻の臓器別内容を抱氏内科各論の順序に並び替えて、ニーマイエル、ウンデルリヒのいずれに由来するかを以下に示す。

ポンペの『原病各論』（長崎医科大学貴重図書１２４）を調べると、炎症の中に各器官の炎症をまとめるなど臓器別の内科学ではない。ボードインが初めて臓器別(器官系統型)の内科学を教えたのである。その原典はウンデルリヒとニーマイエルの内科書である。ニーマイエル二巻の蘭語版（１８６３）はおそらく未着であったので、ウンデルリヒを主に使用したと考えられる。ウンデルリヒとニーマイエルの内科書の日本への影響を見てみると、佐藤尚中は１８６１年長崎留学中にウンデルリヒの内科書を読み、早速肺諸病（喀血篇）を翻訳した。関寛斎の長崎在学日誌によれば養生所で尚中が喀血の講義したとある。佐倉養生所でもウンデルリヒの内科書を隔日講義した。晩年の尚中はオランダ語新版のニーマイエルの内科書翻訳に全精力を傾け、その翻訳『済衆録』の出版直前に逝去した。関西においてもニーマイエルの内科書は重視され、新宮凉民，凉閣が翻訳した『仁墨児内科則』がある。臓器別（器官系統型）の内科学がいちはやくボードインによって教えられ、日本に多大の影響を与えたのである。

7. コステル著　基礎人体生理学

Koster, W., *Grondbeginselen der nattuurkunde van den mensch*.Vrij bew.naar het Fr. van J. Bèclard.Tiel,1862.

ボードインの生理学講義の原典

1862 年 10 月末長崎に到着しポンペの跡を継いだボードイン（A.F. Bauduin）は、F. C. Donders と共著で『人体生理学提要 *Handleiding tot de natuurkunde van den gezonden mensch* Utrecht 1851,53』を著している。二人の教え子であるポンペは、この本を生理学講義の原典として利用した。2 巻からなる名著であり、ドイツとロシアで翻訳出版された。しかしドンデルスが教科書出版を義務付けていたユトレヒト陸軍医学校からユトレヒト大学の生理学教授に栄転したために、神経生理学と生殖を含むはずの第 3 巻は出版されなかった。ポンペは生殖は教えたが、新興の神経生理学は教えなかった。ボードインは神経生理学を含む出版されたばかりのコステルの書を携えて来日したのであろう。長崎における生理学講義録（長崎医科大学貴重図書 N. 119、人身究理書）は、植物性機能、動物性機能と生殖機の３篇を包括する。その章立ては一部を除けば植物性機能、動物性機能と生殖の 3 篇からなるコステルの『人体生理学提要』とよく一致する。新興の神経生理学を教えたのはボードインが最初である。人身究理書の神経生理学の内容は、触覚之論（知覚の総論的内容）、鼻管の論、味神経之論､聴管之論、筋運動之論、声音談話等の筋作用、神経論、顕微鏡上の神経之論、脳神経官能之論、脳実体之論、脊髄及び神経之論、交感神経之論であり、コステルの章立てとよく一致する。最後の論生殖器之機能は簡略である。

展示の『菩氏生理記聞』3 巻は最初に植物性官能、動物性官能と生殖機の 3 篇からなることが書かれているが、植物性官能のみである。明治 7 年（1874）に出版され、東京、大坂、京都三都書肆が取り扱っていてボードインの生理学講義録が明治になっても広く読まれていたことがわかる。

展示の『抱氏人身窮理書』巻上も最初に植物性官能、動物性官能と生殖機の 3 篇からなることが書かれているが。植物性官能の一部のみである。

ボードインは帰国直前 1870 年末に東京大学の前身、大学東校で司馬凌海の通訳で神経生理学の講義をし、『日講紀聞』として出版された。島村鼎甫の序文から、神経生理学を講義できるのはボードインしかいないと考えての依頼であったことがわかる。

江戸医学所で学んだ石黒忠悳は『懐旧九十年』でよく読まれた医学の蘭書を列挙し、生理学ではコステルを挙げている。

8.　菩氏生理記聞

9. 抱氏人身窮理書　巻上 1 冊　　抱道英（ボードイン）：口授

10. 日講記聞

１１～１６の解説

ヴォルフガング・ミヒェル　　九州大学名誉教授　研医会研究員

１１．トーマス・バルトリン『古今の観察に基づく解剖学』（初版）

Thomae Bartholini Anatome ex Omnium Veterum Recentiorumque Observationibus. Imprimis institutionibus b. m. parentis Caspari Bartholini ad circulationem Harvejanam et vasa lymphatica. Quartum renovata. Cum Iconibus novis et Indicibus. Lugduni Batavorum: Ex Officina Hackiana, 1673.

デンマーク人医師・数学者・神学者トーマス・バルトリン（Thomas Bartholin, 1616–1680）は多くの学者を輩出した家系に生まれた。父カスパー・バルトリン（Caspar Bartholin, 1585-1629）の著書『Anatomicae Institutiones Corporis Humani（人体解剖学教程)』は日本にも伝わり『カスパル解剖書』として『解体新書』執筆の際に参照されている。「バルトリン腺」の発見で知られるのは、トーマスの息子で祖父と同名のカスパー・バルトリン（Caspar Bartholin, 1655–1738）である。

当時、デンマーク王の許可のもとで多くの死体解剖が行われたが、トーマス・バルトリンは胸管などを発見し、人間のリンパ系の研究で医学史に名を残した。また、1673年にはデンマーク初の学術雑誌『Acta medica et philosophica hafniensia（コペンハーゲンの医学・哲学紀要)』を創刊している。

ライデンで出版された本書は父カスパーの研究を踏まえながら、身体の構造、内臓、血管系、リンパ系などについて論じたものである。「observationes（観察)」が重要な意味を持つ本書の扉絵には通常の死体解剖の光景ではなく、生きているが如き人体を見ながら議論するギリシャの学者風の人物が描かれている。

１２．ローレンツ・ハイスター『外科学』（第２版）

D. Laurentii Heisters [...] Chirurgie, in welcher Alles, was zur Wund-Artzney gehöret, nach der neuesten und besten Art gründlich abgehandelt und in vielen Kupffer-Tafeln die neu-erfundene und dienlichste Instrumenten, nebst den bequemsten Handgriffen der chirurgischen Operationen und Bandagen deutlich vorgestellet werden. Nürnberg: Johann Hoffmanns seel. Erben, 1724.

フランクフルト・アム・マインに生まれたローレンツ・ハイスター（Lorenz Heister, 1683–1758）は、ドイツとオランダの大学で幅広く医学を学び、18 世紀初頭のスペイン継承戦争などで野戦外科医としても経験を積んだ外科医・解剖学者・植物学者である。

1711 年からドイツのアルトドルフ大学で解剖学教授、1722 年からヘルムシュテット大学で解剖学と外科学の教授を務めた。1715 年にドイツ国立科学アカデミー・レオポルディーナ、1730 年にイギリス王立協会の会員に選出されている。

1719 年に発表された『Chirurgie（外科学・外科術）』は大学における外科学の地位を著しく高め、ラテン語、フランス語、英語などに訳された。絵の才能にも恵まれたハイスターは銅版彫刻の技術を習得し、同書の図版は彼自身が作成したとされている。ハイスターが考案した医科器械のうち「ハイステル開口器」は現在でも使用されている。胆嚢管の螺旋状の襞（ひだ）「ハイステル弁」やボロボロノキ科の属名「Heisteria」もハイスターに由来する。

日本に伝わった蘭訳書『Heelkondige onderwijzingen（外科学教育）』（1741 年刊）や『Kort begrip der heelkonst（外科学概要）』（1764 年刊）は、蘭学者に大きな影響を与え、長崎のオランダ商館の大通詞吉雄耕牛による抄訳が遊学者を通じて広く普及した。また、杉田玄白、大槻玄沢、 越邑徳基、羽栗長隠、桐亭社中が作成した『瘍医新書』、『瘍科精選図解』、『瘍科精撰図符』、『協乙斯的盧産論』などの書によって「ヘイステル」の名は刺烏冷斯回私的尓、回斯篤児、恊乙斯的盧、歇伊私的児などの表記で広まった。

１３．ピエール・マーリン『仏蘭辞典』（第６版）

Pierre Marin: Dictionnaire François et Hollandois, composé sur le dictionnaire de l'Académie Françoise et d'après les meilleurs auteurs qui ont écrit dans les deux langues. Amsterdam: Changuion, 1741.

ピエール・マーリン（Pierre/Pieter Marin, 1667 頃–1718）はフランスのラフェルテ（La Ferté-sous-Jouarre）に生まれ、アムステルダムに移住して語学教師を務めながら、仏蘭・蘭仏辞典、フランス語文法書などの刊行によって、その名を知られるようになった。

フランス語の規範を提示する『アカデミー・フランセーズ辞典』およびフランスとオランダの優れた書物に準拠した『Dictionnaire François et Hollandois（仏蘭辞典）』の初版は 1710 年に刊行され、オランダにおける国語辞典の成立に大きな影響を与えた。

『仏蘭辞典』は宝暦 4 年（1754）に長崎に伝わり、その後に届いたフランソワ・ハルマ（François Halma）の『蘭仏辞書』とともに蘭学者たちに愛用された。オランダ商館の大通詞西善三郎（?-1768）は本書を元に蘭日辞書の編纂に着手したが、完成に至らぬまま病に倒れ 54 歳で没した。

１４．ジャン・パルファン『外科用人体解剖学』（第２版）

Heelkonstige ontleeding van ’s Menschen Lighaam, waar in de zelfstandigheyd, plaats, grootte, gedaante, getal, maaksel, samenhang, en het gebruyk der deelen, teffens met hunne ziektens en de geneezingwyze klaar en onderscheydentlyk beschreven worden [...] door Johan Palfyn, gezwoore heelmeester, ontleeder en voorlezer in de handwerkende Heelkunde binnen Gent. Te Leyden: By Jan en Hendrik vander Deyster, 1733.

フランドル地方のコルトレイク（Kortrijk）出身のジャン・パルファン（Jan/Jean/Johan Palfijn, 1650–1730）は理髪外科医の父の教えを受け、ヘント（Gent）およびパリで腕を磨き、1675 年頃に故郷に戻ったが、人間の骨格標本の所持が問題視され、故郷を離れてイーペル（Iper/Ypres）で開業した。1695 年に再びヘントに移り住み、1708 年から地元の医学校（Heelkundige School）で骨学と外科学を教えた。彼は産婦人科においても評価されていた。

1701 年にフラマン語で発表された『Nuova Osteologia（新しい骨学)』は、フランス語やイタリア語に翻訳された。1710 年に出版された『Anatomia Chirurgica（外科解剖学)』も高い評価を得た。1718 年にライデンで刊行された『Heelkonstige ontleeding van 's menschen lighaam（外科用人体解剖学)』は日本にも伝わり、『パルヘイン解体書』の書名で『解体新書』に参考文献として記載されている。

１５.『アンブロワーズ・パレ全集』（第７版）

Les Oeuvres d'Ambroise Paré conseiller, et premier Chirurgien du Roy [...] Divises en vingt-neuf livres ; Avec les figures et portraicts, tant de l'Anatomie que des instruments de Chirurgie, & de plusieurs Monstres. Septiesme Edition. Paris: Buon, 1614.

「近代外科の父」と称えられるアンブロワーズ・パレ（Ambroise Paré, 1510–1590）は理髪外科医の見習いを経て、1529 年からパリの市立病院でさらに 3 年間修業を積んだ。その後、フランス軍のトリノ遠征で軍医として銃創の治療経験を重ね、様々な画期的な治療法を考案して広く注目を集めた。大学教育を受けていないにもかかわらず、パリ大学の有名なサン・コム学院（Collège de Saint Côme）の会員に推挙され、1552 年からアンリ 2 世、フランソワ 2 世、シャルル 9 世、アンリ 3 世の侍医を歴任し、1562 年に勃発したユグノー戦争ではカトリック陣営の軍医を務めた。パレが残した「Je le pansai, Dieu le guérit（我包帯す、神、癒し賜う)」 という有名な言葉には彼の謙虚な姿

勢が表れている。

1585 年に出版された『パレ全集』は 17 世紀まで繰り返し再版され、ドイツ語、英語、オランダ語に翻訳された。 オランダ語版（『De chirurgie, ende opera van alle de wercken van Mr. Ambrosius Paré』）は 1592 年から何度も版を重ねている。慶安 3 年（1650）に出島商館医シャムベルゲル（Caspar Schamberger）がこの本を大目付井上筑後守政重に紹介すると、その翌年に幕府は東インド会社に対して義手、義足、義眼の注文を出した。「紅夷外科宗伝」を執筆したオランダ商館の通詞楢林鎮山（1648-1711）は『パレ全集』の記述と図版を大いに参照している。また、整骨術に関するパレの教えは華岡青洲にも影響を与えた。

１６．ヨハン・フェスリンク『解剖学体系』（ドイツ語版）

Künstliche Zerlegung des gantzen menschlichen Leibes. Anfangs in Lateinischer Sprache beschrieben [...] von dem Hoch-gelährten und weit-berühmten Herren D. Joanne Veslingio, [...] allen Wund-Aertzten zu sonderbaren höchstersprießlichen Nutzen, ins Teutsche übersetzt durch Gerhardum Blasium. Nürnberg: Johann Hofmann, 1688.

ヨハン・フェスリンク（Johann Vesling/Johannes Wesling, 1598–1649）はドイツのミンデン（Minden）に生まれたが、幼い頃に家族とともにヴェネツィアに移住した。医学の基礎教育を受けたのち、ヴェネツィア大学の解剖の執刀者として採用され、また、ヴェネツィア領事の侍医として中近東の薬用植物などを調査した。1632 年にパドヴァ大学の解剖学・外科学の教授となり、1637 年にアルピーニ（Prospero Alpini）の後継者として、パドヴァ大学植物園の園長に就任した。彼が大学の「Teatro Anatomico（解剖学劇場）」で行った公開講義には学生、学者、一般市民らが殺到した。弟子にトーマス・

バルトリンがいる。

1641 年にパドヴァで出版されたラテン語版（『Syntagma anatomicum publicis dissectionibus in diligenter auditorum usum aptatum』）は約 150 年にわたり、わかりやすい解剖手引書として使用され、ドイツ語版は彼の死後、ラテン語が読めない「Wund-Aertzte（理髪外科医）」向けに出版された。

1659 年から版を重ねたオランダ語版（『Konstige ontleding des menschelijcken lichaems』）はやがて日本に伝わり、古医方派の山脇東洋、蘭方系の河口信任、伏屋素狄も入手している。『解体新書』の参考文献には『ヘスリンキース解体書』の書名で記されている。

１７～２２の解説

海原　亮　住友史料館主席研究員

１７．Enchiridion Medicum,　Handleiding tot de Geneeskundige Hufeland, C.W.　　1837 年　Amsterdam

１８．杉田成卿（すぎたせいけい）（訳）フーフェラント『済生三方』『医戒』

訳者杉田成卿は生没年、文化 14～安政 6 年（1817～1859）、43 歳没。玄白の次男立卿を父にもつ。天保 7 年（1836）蘭方医坪井信道に入門、蘭学・医学を修めた。天保 11 年、幕府天文台の訳員を任ぜられ、蘭書翻訳に従事。ドイツ語・ラテン語にも通じた。弘化元年（1844）オランダ国王が幕府に開国を薦める国書を呈したさい翻訳グループの一員となり、またペリー来航時もアメリカ国書を翻訳している。後に、蕃書調所の教授をつとめた。『海上砲術全書』（天保 15 年、宇田川榕庵・箕作阮甫・杉田立卿らと共訳）など、訳著多数。

『済生三方』『医戒』は、嘉永 2 年（1849）に刊行されたもの。

展示する 4 書のうち『医戒』は、翻訳医書『済生三方』の「附刻」という位置付けである。

底本は、フーフェランド C. W. Hufeland （1762-1836）による医学便覧（ドイツ語）、これをハーヘマン H. H. Hageman （1813−1850）がオランダ語訳し、「エンシリヂオン。メヂキュム」 （『済生三方』「凡例」） Enchiridion Medicum / Handleiding tot de Geneeskundige Praktijk として 1838 年に刊行されたものである。成卿はこのうち “De Drie Hoofdmiddelen der Geneeskunde （医学の、3 つの基本原理）” の部分をまとめている。

フーフェランドの『医戒』は、医療倫理や職業としての医のありように指針を示すものとして、現代医学にも有益な内容とみなされている。成卿による翻訳は、きわめて原著に忠実とされ、そのため西洋の事情を解さない当時の読者には、難解なものとなってしまった。

成卿訳『医戒』の 8 年後、緒方洪庵はあらたな翻訳、ダイジェスト版『扶氏医戒之略』を著し、同書の大要を 12 章にまとめた。これは、彼の家塾「適塾」に掲げられ、門弟を指導するうえの指針にされたという。

１９．新宮涼庭（しんぐうりょうてい）『和蘭　究理外科則』

著者新宮凉庭は生没年、天明 7～安政元年（1787～1854）、68 歳没。丹後国由良（現在、京都府宮津市）出身。宇田川玄随訳の『西説内科撰要』に接し蘭方医学を志して長崎へ学問修業に赴いた。長崎では吉雄権之助・吉雄献作らに師事、オランダ商館医師バティ Bateij に学んだ。文政 2 年（1819）京都の室町高辻に開業、町医として名声を得た。

プレンキ　J. J. E. von Plenck （1738～1807）の外科書・解剖書（『解体則』）など、数多くの蘭医書を翻訳し、医学教育にも熱心だった。天保 10 年（1839）南禅寺界隈に設けた「順正書院」では、自らの著作を用いて門生に教え、また書院は文人墨客が集うサロンともなった。

展示する『窮理外科則』は凉庭の代表的な著作、翻訳書である。

原著はオランダ人医師ゴルテル（「我爾徳兒（ゴルトル）」） J. de Gorter（1689−1762）の Praxis Medicae systema, 1750. 同書が「詳カニ生象生理ヲ説キ、凡ソ外科ニ預ル諸病ハ悉ク論説シテ、其治法ヲ挙ク」ことから、「病理治術精粋多論ナルガ故ニ」全 13 編に分けて編集した。

ゴルテルの医学は、ライデン大学（オランダ）で活躍したブールハーフェ H. Boerhaave（1668−1738）の機械論的医学思想に影響をうけたものとされる。凉庭は、遺訓『駆豎斎家訓』のなかで、初学の者にゴルテルの外科書を読ませよ、と述べており、イペイ Adolf Ypey （1747-1820）による解剖書や、プレンキの外科書とともに、これをとりわけ重視した。

文化 14 年（1817）最初に第 7 編（創・打撲・火傷・凍瘡などの各部を収載）を刊行し、その後、嘉永 3 年（1850）頃まで、断続的に刊行が続いた。

２０．小森桃塢（こもりとうう）『泰西方鑑（文政版）』

著者小森桃塢は生没年、天明 2～天保 14 年（1782～1843）、62 歳没。美濃国大橋家に生まれ、伏見（現在、京都市）の医家小森義晴の養子となった。

大垣の江馬春齢（えましゅんれい）から西洋医学を学んだ後、上洛し海上随鴎（うながみずいおう）（稲村三伯）晩年の門人となり、藤林普山（ふじばやしふざん）と並び称された。その後、京都で開業。文化 9 年（1812）と文政 4 年（1821）の 2 度、解剖実験に携わった。（→【22】池田冬蔵（とうぞう）『解蔵図賦』）

文政 3 年従六位下、肥後介（ひごのすけ）に任じられ、同 11 年縫殿助（ぬいのすけ）となり、天保 14 年には従五位下、信濃守を叙任された朝廷医である。文政 9 年（1826）2 月中旬には、新宮涼庭とともに、江戸参府途上の蘭医シーボルトと京都で面会している。また、その生涯にわたって 300 名を越える、多くの門弟を育成したことでも知られる。

著書に 18 世紀末に刊行された西洋の薬方・治療書の翻訳『蘭方枢機』や、桃塢の講義を弟子の池田冬蔵がまとめた『病因精義』などがある。

展示する『泰西方鑑』は、文政 10 年（1827）刊行。書名の通り、西洋で用いられる治療用の薬品を収め、約 3000 種について論じたもの。展示中の冒頭部は、参照・引用した洋書およそ 100 部を列挙し、独自の符号を定めている。本邦の薬材を使い、代薬 40 余種を提示した点、翻訳を中心とした初期の蘭学から一歩、前進したものと評価できる。わが国の蘭学はこの時期、舶来の知識・技術を応用する、あらたな段階へと展開した。

第 1 巻 137 丁、第 2 巻 195 丁、第 3 巻 163 丁、第 4 巻 157 丁、第 5 巻 188 丁と、付録 55 丁を数える。各巻の冒頭には「参録」者として、3 名の門人（池田冬蔵〔越前〕・山崎玄東・吉田君謙〔平安〕）が記されている。

２１．池田冬蔵『解臓図賦（文政版）』

文政 4 年(1821)12 月 16 日、小森桃塢が主宰し、京都西刑場で実施された刑死(男、23 歳)解剖の記録で、桃塢門人の池田冬蔵がまとめて、翌文政 5 年 3 月に刊行された。

本書の奥付には、「発行書肆」として、江戸の須原屋伊八、大坂の河内屋喜兵衛、京都の若山屋茂助ら、当代を代表する書物屋の名が並んでいる。

序文によると、桃塢は文化 9 年（1812）伏見在住時代に 1 度目の解剖実験をおこなったが、冬蔵をはじめ一部の門人はまだ入門していなかったため、あらためてこれを望み、官に乞うて実現させた、という。

当時の解剖実験では、絵の巧みな者を参加させ、臓器を描かせて後学の参考とすることが多い。『解臓図譜』で「図象」を担当した伊藤寿（山平、近江国膳所藩士か）の流派は不明だが、写実を得意とする絵師だろう。

本書の前半には、解剖実験の当事者・参観者が列挙されている。「教師」として小森桃塢、実験の主導者たる「督務」には、門弟の池田冬蔵・藤田長禎を置き、主解 6 名・助刀 5 名・説弁 3 名・書記 4 名・図象 3 名・曲事 3 名・参事 4 名・司籍 3 名・司鏡 3 名・司器 1 名・監病 2 名・接客 2 名・司礪 1 名、他に僕役 20 名を配したという。また、実際に解剖を指揮する「主解」は、それぞれ分担を決め、たとえば小森義真（桃塢の子）は胃・大小腸・乳糜管を担当した。

続いて、同門で来会した者 11 名と、他門の観客 49 名の氏名を載せている。実験には、計 133 名が参加したことがわかる。参観者には、京都の著名な蘭学者藤林普山や、伊東舜民（圭介、幕末～明治に活躍した博物学者）の名もみえる。

池田冬蔵がまとめた桃塢の講義録『病因精義』は、西欧的な医学論を基礎としたものだった。長崎経由で移入された先端の知識・技術は、文政 4 年の解剖で、京都の医界に大きな成果をもたらしたのである。『解臓図譜』は、幕末に至るまで、長く数版を重ねた。

２２．緒方洪庵（おがたこうあん）『虎狼痢（コラウリ）治準』

著者緒方洪庵は生没年、文化 7～文久 3 年（1810～1863）、54 歳没。備中国足守の出身、幕末の大坂を代表する蘭方医。大坂で中天游、江戸で坪井信道らに学ぶ。

天保 7 年（1826）には長崎へ遊学し、オランダ商館長に就いて学んだといわれるが、当時の交友関係を含めて、不明な点も多い。帰坂後に創設した「適塾」では数多くの門生を教授し、後の医界や近代国家を主導する逸材を輩出したことでよく知られている。

安政 5 年（1858）7 月、長崎に入港したアメリカの軍艦ミシシッピー号のもたらしたコレラは、九州・四国を皮切りに、近畿・江戸に至る大流行となった。これは、世界史的にみると 1852～60 年にかけての世界的流行（パンデミック pandemic）期にあたる。長崎では、医学伝習所で指導していたオランダ海軍医師ポンペ J. L. C. Pompe van Meerdervoort （1829-1903）が主導し、西洋流の手法に倣って、コレラ対策をおこなっていた。

大坂でも 8 月半ばごろより流行をみたが、十分な対処を為し得なかったため、洪庵は自身の手許にある西洋医書（ドイツ人医師のコンラジ〔J. W. H. Conradi, 1780-1861〕・モスト〔G. F. Most, 1794-1832〕・カンスタット〔K. F. Canstatt, 1807-50〕による 3 書）から、コレラに関する項を抄訳、緊急出版した。9 月 6 日、100 部限定（「百部絶板　不許売買」）で刊行されたのが本書『虎狼痢治準』である。

ただし、研医会本は、巻末に出版広告と「安政四年丁巳初秋」の年記載がみえる。

洪庵自身、戸塚静海宛ての書簡で、同書は「世上のため一書急々編訳仕候」ものゆえに、「実に急卒の所業、電覧を汚すべきにもこれなく候へども、唯々世の為めに苦辛仕候赤心の程、御察観下さるべく候」（『緒方洪庵のてがみ』）と訳業の粗雑さを自覚している。だが、彼の行動は「世上のため」、医師として有益なことをしたい、との「赤心」に拠るのだった。

２３～２６の解説

大島明秀　　熊本県立大学准教授

２３．２４
キール『天文学・物理学入門』と志筑忠雄訳「求力法論」

キール（John Keill）はイギリス・オックスフォード大学の天文学教授をつとめた人物で、同大学でニュートン物理学を初めて講義した一人であった。ラテン語で行われたその物理学講義録は、大学生向けの教科書として1701年に『物理学入門』（*Introductio ad veram physicam*）という名で上梓され、ついで1718 年には天文学関係の講義が『天文学入門』（*Introductio ad veram astronomiam*）という一冊となった。

並行してキールは王立協会の機関誌『フィロソフィカル・トランザクションズ』（*Philosophical Transactions*）に英語論文「引力の法則及び他の物理学の原理について」（On the Laws of attraction and Other Principles of Physics, 1708）を掲載し、また、求心力の法則に関するラテン語の2論文（Epistola ad Clarissimum Virum Edmundum Halleium Geometriae Professorem Savilianum, de Legibus Virium Centripetarum, 1708）、（Observationes in ea quae edidit Celeberimus Geometra Johannes Bernoulli in Commentariis Physico Mathematicis Parisiensibus Anno 1710, de inverso Problemate virium Centripetarum. Et eiusdem Problematis solution nova, 1714）を発表した。

1741 年にオランダ・ライデン大学天文学教授リュロフス（Johan Lulofs）は、上記を含めたキールによる六編の論文・講義録などを一冊に編み、そこに自身の注釈も付してオランダ語に訳した『天文学・物理学入門』（*Inleidinge tot de waare Natuur- en Sterrekunde*）を刊行した。

さて、長崎の蘭学者志筑忠雄はその生涯を蘭書の翻訳に捧げ、天文・物理学、オランダ語文法学、海外事情・地理誌に及ぶ様々な訳書を産出したが、中でもキール『天文学・物理学入門』訳業に半生を費やした。弱冠23歳時の著書「万国管闚」（ばんこくかんき）（1782序）においてキール『天文学・物理学入門』に言及していることから、志筑がこの頃までに本書を閲覧していたことが分かり、爾後、志筑は二十年以上にわ

たって和訳に取り組み、その仕事は享和2年（1802）に「暦象新書」として大成する。この訳本によって初めて日本にニュートン物理学が伝えられることとなったが、訳には適宜改変が加えられており、ニュートン物理学に対する正確な理解が目指されたというより、伝統的な気の理論によって再解釈されたものであった。

かかる訳業の一環として天明4年（1784）に成された「求力法論」は、キール『天文学・物理学入門』中に収められた前記「引力の法則及び他の物理学の原理について」の蘭語訳（Over de Wetten der Aantrekkinge, en andere Grondbeginzels der Natuurkunde）部分を訳出したもので、分子間力について論じた内容となっている。研医会図書館所蔵の「求力法論」には志筑忠雄の奥書とともに旧蔵者を示す朱印「養素堂印」が認められるが、養素堂がいかなる人物かは不明である。

２５．２６
ケンペル『廻国奇観』と黒沢翁満編『異人恐怖伝』

ケンペル（Engelbert Kaempfer）は、1651 年 9 月 16 日北部ドイツの地方都市レムゴーで生まれ、文献学、歴史学、地理学、哲学、古典文学、医学、哲学、法学を修め、スウェーデン王国使節団の秘書官を経てオランダ東インド会社に採用され、船の外科医としてオランダ領インドのツチコリン、コーチン、セイロン、バタフィア、アユタヤ滞在を経て、元禄 3 年（1690）9 月長崎に入港、2 年間日本に滞在した。

ヨーロッパ帰郷後の 1712 年、生前の唯一の著書『廻国奇観』（*Amoenitates Exoticae*）が故郷レムゴーで刊行された。原書名に含まれた amoenitates という語は、優美な、若しくは魅力的なという文字通り魅力ある言葉で、古典ラテン文学でよく用いられている言葉であるが、中世に始まる旅行文学にも見られ、ケンペルの付したこのタイトルは、古典ラテン文学以来用いられてきた語彙を利用した伝統的な部分と、旅行文学の中で用いられたばかりの語彙を使用するという革新的な部分を併せ持っている。また、全体が 5 巻から構成されているところは、古代ローマ帝国の政治家で学者、弁論家でもあったキケロの影響を受けているものと指摘されている。

内容は主にペルシャ、インド、日本の植物、医学、薬学などについてであった。挿図はケンペルが自費で雇った版画家に依頼したので粗末なものであったが、本書はヨ

ーロッパ知識人の間でケンペルの名を広め、中でも第 5 巻「日本植物誌」(Flora Japonica) は、西洋における本格的な日本植物研究の原点となった。

『廻国奇観』第 2 巻第 14 章は、「日本王国が最良の見識によって自国民の出国および外国人の入国、交易を禁じていること」(Regnum Japoniae optimâ ratione, ab egressu civium, & exterarum gentium ingressu & communione, clausum.) という論文で、これが後にショイヒツァー版『日本誌』(1727) に所収され、そのオランダ語訳第 2 版 (1733) を底本に、長崎の蘭学者志筑忠雄が「鎖国論」(1801) と題して訳出し、これが近世後期の日本で受容された。

写本で広まった「鎖国論」の論旨は、外との交流を閉ざすことはキリスト教では原則的に禁止であるが、諸条件を有する日本については例外的に認めるという内容で、そのケンペル原文の見解に加え、西洋人に対する志筑の排外的な注が時折交えられたものであった。ただし、読者にはケンペル原文や志筑訳の意図から離れたものとなって享受される。特にケンペルが指摘した日本の諸条件を根拠として、平田派国学者を中心に「鎖国論」は「西洋人ケンペルによる日本賛美論」に読み替えられ、幕末に至るまでこの読み方が流布、古典化していった。

嘉永 3 年 (1850)、黒沢翁満は世間に広まっている「鎖国論」写本を複数入手・校訂した上で、『異人恐怖伝』と改題して木版 3 巻で初めて上梓した。本書は「鎖国論」を翻刻した前編と、翁満自身の見解を述べた後編「刻異人恐怖伝論」の全 3 巻から構成される。「刻異人恐怖伝論」によれば、翁満もまた平田派国学者と同様に「鎖国論」を解釈した上で、異国に恐れを抱くことに起因する民衆の不安定な精神状況の解消のために出版に至った経緯を述べている。

２７～３９の解説

梶 輝行　　横浜薬科大学教授

２７．　ゴルテルの蘭書

ヨハネス・デ・ゴルテル　Johannes de Gorter（1689-1762 年）

ゴルテルは、1689 年 2 月 19 日オランダの港町エンクハウゼン Enkhuizen で生まれた。その後同町の外科医のもとで外科術の修業をはじめ、やがてハールレム Haarlem の外科医ファン・デン・ホウト Tjalling van der Hout に学び、19 歳で資格試験に合格し、エンクハウゼンの外科医の資格を得た。1709 年９月９日、ライデン大学医学部に入学し、ここでブールハーヴェ教授の講義にも出席し、1712 年６月 31 日に論文審査を経てＭＤを取得し、同大学を卒業した。その後、エンクハウゼンに帰り、そこで内科医として開業した。産科に関する研究で医学博士の学位をライデン大学で取得し、当地で 13 年間にわたり産科臨床学を修めた。1725 年６月 12 日からハルデルウェイク Harderwijk 大学教授となり、翌年正教授となり同大学評議会はＰｈＤの学位を授与した。その後、ゴルテルは同大学で４回学部長を務め、専門の産科のほかに化学や植物学などの講義も担当した。当時のオランダはブールハーヴェの全盛時代であり、ゴルテルのもとで後に植物学の大家となるカール・フォン・リンネ Carl von Linne が学位を取得した。1754 年から 1758 年の期間、ロシアのエカチェリーナ女王の侍医となって、長男のダビド・デ・ゴルテル David de Gorter とともにペテルスブルクに赴任した。年俸 2, 000 ルーブル、退職後の年金 2, 500 ルーブルなど破格の待遇で迎えられた。1758 年、ゴルテルはオランダに帰り、ウェイク・ベイ・ドュールステデ Wijk bij Duurstede を終の棲家とし

GEZUIVERDE
GENEESKONST,
OF
KORT ONDERWYS
DER MEESTE
INWENDIGE ZIEKTEN;
TEN NUTTE VAN
CHIRURGYNS,
Die ter Zee of Velde dienende, of in andere omſtandigheden, zig genoodzaakt vinden dusdanige Ziekten te behandelen.
DOOR
JOHANNES DE GORTER,
Medicinæ Doctor en Profeſſor.
TE AMSTERDAM,
By ISAAK TIRION,
Boekverkooper, vooraan in de Kalverſtraat,
in HUGO GROTIUS, MDCCXLIV.

た。1762 年９月 11 日、ゴルテルは同地で 73 歳の生涯を閉じた。

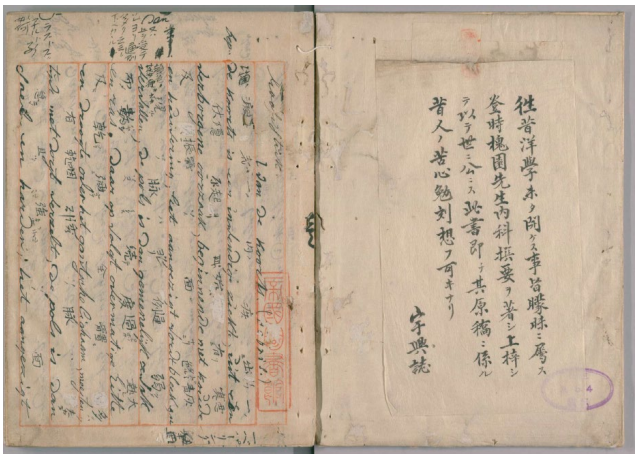
ゴルテルの著書は、石田純郎氏の調査（『オランダにおける蘭学医書の形成』）によると 28 種類があり、そのうち４分の３がラテン語、その他がオランダ語の著作であるという。

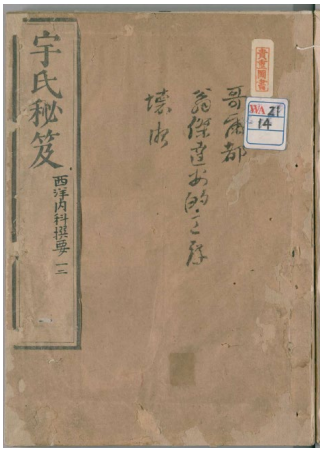
今回紹介する蘭書は、1744 年にアムステルダムで出版した内科書である『簡易治療術書』（Johannes de Gorter: “Gezuiverde geneeskonst, of kort onderwys der meeste inwendige ziekten : ten nutte van chirurgyns, die ter zee of velde dienende, of in andere omstandigheden, zig genoodzaakt vinden dusdanigeuziekten te behandelen.” Amsterdam, 1744）である。この書名を和訳すると、『精選内科術。海戦や野戦への従軍あるいはそれ以外の場面に遭遇した外科医の利用に供するための多様な内科疾病に関するハンドブック』となる。同書は扉の表紙のとおり初版本にあたるが、本館には別に 1761 年刊行の第３版も所蔵する。1744 年初版本は全 264 頁、縦 21.0 ㎝・横 13.5 ㎝であり、1761 年第３版本は全 305 頁、縦 22.0 ㎝・横 13.5 ㎝である。

ゴルテルのその他の著書としては、1731 年にライデンで刊行した『簡易精製薬術書』（Johannes de Gorter: “Gezuiverde geneeskonst.” Leijden,1731、第 2 版が 1746 年ライデンで、第 3 版が 1762 年アムステルダムで刊行）があるが、国内での所蔵は確認できない。

オランダ・ハーグ国立中央文書館所蔵の日本関係文書によると、ゴルテルの蘭書の長崎への舶載は、1806（文化 3）年の入港蘭船（アメリカ号、中立国傭船）の積荷リストにみえ、正式な注文に応じて対応された初見と考えられる。それ以降の蘭船の積荷リストにもゴルテルの著書は注文に応じて多数もたらされたことがわかる。

現在、江戸幕府旧蔵蘭書を所蔵する国立国会図書館には所蔵がなく、宇田川玄随がゴルテル蘭書を筆写した『宇氏秘笈』が所蔵されている（同館デジタルコレクションより）。他に静嘉堂文庫には同書名で宇田川玄真の筆写本４冊も大槻文庫本として所蔵されている。また、1744 年初版本は、本館以外に天理大学図書館の所蔵にかかるという。





● ゴルテル『簡易治療術書』の翻訳書

２８．宇田川玄随（うだがわげんずい） 訳『西説内科撰要（せいせつないかせんよう）』

今回展示する本書は、宇田川玄随がゴルテルの『簡易治療術書』を翻訳した『西説内科撰要』である。本書は、寛政５（1793）年から文化７（1810）年までに全 18 巻 55 篇 320 章からなる『西説内科撰要』として出版され、この訳書が西洋内科を日本に初めて紹介した書物として有名である。この原書は、”Gezuiverde geneeskonst, of kort onderwys der meeste inwendige ziekten : ten nutte van chirurgyns, die ter zee of velde dienende, of in andere omstandigheden, zig genoodzaakt vinden dusdanigeuziekten te behandelen. Amsterdam, 1744.” であり、1744 年の初版本からの翻訳である。

本書の内容は、７篇 55 項目を全 18 巻で上梓し、「発無定処」「病属頭脳」「病属頚項」「病属胸膈」「病属腹肛」「病属尿道」「病属皮表」の７篇からなる。病気の症状による分類がほとんどであり、病症の定義、原因、鑑別、結果、療法が各篇各項目で著述されている。翻訳した玄随は本文中に多数の細字割註を施して解説を付している。その解説の出典は、『解体新書』からの引用と注釈が目立つが、全体では約 30 種類の書物にあたっていることがわかる。不備のある点はそのあとの『増補重訂西説内科撰要』に引き継がれることになった。

本館所蔵本は、体裁は縦 25.7 ㎝・横 18.0 ㎝、四周単辺、片仮名交文、全 18 巻の版

本、第１巻には丹波元簡、桂川甫周（国瑞）、宇田川玄随（晋）の序があり、玄随の序の末尾には寛政４（1792）年に序文が書かれたとあり、「巻一」の巻首には「遠西　玉函涅斯垤我爾徳児　著」「日本　津山　宇田川玄随　譯　醫官法眼　桂川甫周国瑞　閲」とみえる。

宇田川玄随（名は晋、号は槐園）は、宝暦５（1755）年に津山藩医の宇田川道紀の子として誕生し、最初漢学を得意として漢方を学んだ後、安永８（1779）年大槻玄沢からオランダ医学がすぐれていることを聞き、桂川甫周や大槻などからオランダ語や医学の学習に転じた。津山藩の江戸屋敷は、現在の東京駅の南端辺りの鍛冶橋付近にあり、玄随はこの藩邸で生まれ育ち、活動した。ゴルテルの蘭書の翻訳には、約 10 年を費やして完訳した。18 巻のうち最初の３巻は寛政５（1793）年に出版し、全巻の出版は文化７（1810）年のことであった。玄随は寛政９（1797）年 12 月 18 日に死去し、浅草誓願寺塔頭の長安院に葬られたことから、本書の完行を見ずして没したことになる。

２９．宇田川玄真（うだがわげんしん）・藤井方亭（ふじいほうてい）訳『増補重訂西説内科撰要（ぞうほじゅうていせいせつないかせんよう）』

今回展示する本書は、”Gezuiverde geneeskonst, of kort onderwys der meeste inwendige ziekten : ten nutte van chirurgyns, die ter zee of velde dienende, of in andere omstandigheden, zig genoodzaakt vinden dusdanigeuziekten te behandelen. Amsterdam, 1773. ”であり、1773 年の第４版を翻訳したものである。

翻訳者である宇田川玄真は、義父玄随の遺著である『西説内科撰要』を、上記の蘭書を用い、門人の藤井方亭の増訳作業により文政５（1822）年に訳稿を仕上げ、全 18 巻 64 篇 393 章を 6 冊として編集し、『増補重訂西説内科撰要』の書名をもって刊行した。本書も前書と同様に細字割註が多く挿入され、そこには西洋医学に着目した校合と言及に特徴が現れていて、増補重訂の意味合いを明確にしている。『西説内科撰要』は幕府の蘭方奥医師の桂川国瑞（甫周）と漢方を代表する多紀元簡（桂山）が序を寄せているの対して、『増補重訂西説内科撰要』は宇田川玄随の序文のみである。

本館所蔵本は、体裁は縦 25.2 ㎝・横 17.8 ㎝、四周単辺、片仮名交文、全６巻本である。

宇田川玄真は、明和６（1769）年に伊勢国飯南郡大石村の安岡四郎衛門の子として

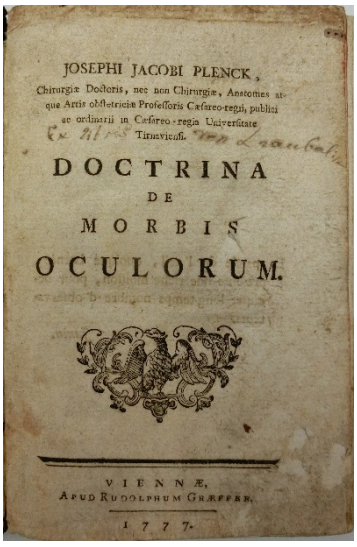
誕生した。江戸に出て宇田川玄随に漢学を学び、次いで桂川甫周、大槻玄沢のもとで蘭学を修めた。そののち、杉田玄白の養子となったが、放蕩のため離縁され、稲村三伯の仲介で寛政10(1798)年に宇田川玄随の跡を継ぎ津山藩医となった。文化10(1813)年に幕府天文台の阿蘭陀書籍和解御用を命ぜられ、ショメールの『百科全書』の翻訳を担当し、死去するまで同役を務めた。玄真には嗣子がなかったので、大垣藩医の江沢養樹の長男榕庵を養子とし、天保２(1831)年に隠居して家督を譲ったが、同５(1834)年12月4日に死去し、浅草誓願寺に埋葬された。その後墓所は関東大震災ののち多摩霊園に移された。玄真の門人には、坪井信道、箕作阮甫、飯沼慾斎、戸塚静海、藤井方亭らがいる。

なお、藤井方亭は、安永７（1778）年４月28日に、紀伊藩鳥見役から町医者となった藤井周朔の長男として伊勢国庵芸郡野田村に生まれた。父のもとで医学修業ののち、江戸に出て宇田川玄随、宇田川玄真のもとでオランダ医学を修め、浅草鳥越で医師として開業した。藤井は、文化５（1808）年に玄真に随行して加賀藩前藩主の治療で金沢に赴き、翌年12月に加賀藩最初の蘭方医となった。また、文化８（1811）年には、蘭書翻訳御用を命ぜられ、蘭書翻訳に従事するところとなった。弘化２（1845）年８月８日に68歳で死去し、浅草の唯念寺に葬られた。

３０．　プレンクの蘭書

ヨーゼフ・ヤコブ・エドラー・フォン・プレンク
Joseph Jakob Edler von Plenck　　（1733-1807 年）

プレンクは、1738 年 11 月 28 日、オーストリアのウィーンで生まれた（生年には 1732 年、1733 年、1739 年など諸説があるが、ここではオーストリアで刊行された伝記辞典に依拠した）。製本業の父親フランツと母親マリア・アンナとの子どもとして最初は家庭で、のちにイエズス会の学校でラテン語を学んだ。1753 年に外科医をめざしてヨハン・クリスチャン・レッテル Johann Christian Retter に入門し、その後ウィーン大学医学部で学び、内科医のアントン・デ・ハーン Anton de Häen (1704-1776)につき、また外科医のレーベル Leber や産科医のレマーヒャーLebmacher にも師事した。1753 年から 1763 年まで七年戦争が勃発し、プレンクは軍医として従軍し、砲兵隊の外科医となった。その後大学に戻り 1756 年に外科医の資格を取得した。1764 年に聖マルク病院経営者の娘であるカテリーナ・ソフィア・サルトリーCatherina Sophia Sartori と結婚したが、この妻も若くして妻が亡くなり、1779 年にフランジスカ・オートラス Franzisca Autrath と再婚したが、４人の子どもを残して先に亡くなった。



1770 年、ハンガリーに新設されたチルナウ Tyrnau 大学で、理論外科と外科臨床の教師となり、また精力的に論文などの執筆を行った。1777 年、この大学は皇后マリア・テレジアの意向でブダペストに移転し、オー

フェン Ofen 大学となり、プレンクは同大学でも教師に就いた。1775 年から始まった６カ月間での軍医養成コースを 1781 年から２年制とし、オーストリア・ハプスブルク家のヨーゼフ二世によって 1783 年に皇帝の名を冠したヨーゼフ・アカデミーという内科外科学校に拡充された際に、プレンクはここの教師となった。1786 年には内科・外科の軍医アカデミーに昇格し、学位を与える権限を得ることになった。プレンクはそこで化学と植物学を教え、後には軍事薬局制度の監察官兼アカデミー永年書記官に就任した。

1797 年、フランシス二世の統治下で、プレンクは貴族階級に列し苗字に von が付与された。その後両足に麻痺を患ったプレンクは現役を引退し、1807 年８月 24 日にウィーンで亡くなった。

プレンクの著書として今回展示する本館所蔵の書籍は、1777 年ウィーンで刊行したラテン語著述の『眼科書』“ Doctrina de morbis oculorum. 1777.” である。本書は、わが国では宇田川玄真がマルチヌス・プロイス Martinus Pruys による蘭訳版から『泰西眼科全書』として翻訳したことで知られる。同書は、眉毛、瞼、涙管、結膜、眼球、光彩、房水、水晶体、硝子体液、及び網膜または視覚の病気について著したものである。本館所蔵のラテン語本は、全 219 頁で、縦 18.0 ㎝・横 12.5 ㎝の小型本である。

本館には、これ以外のプレンクの著書として、以下の３点がある。

“Toxicologia seu Doctrina de Venenis et Antidotis.” Viennae.1785.

“Verhandeling over de Venusziekten.” Dordrecht.1792.

“Specielle medizinisch-chirurgische Pharmakologie, oder Lehre von den Kräften der Arzneymittel, welche innerlich und äußerlich bei Heilung der Krankheiten am meisten gebraucht werden.” Wien. 1804-1805.

これ以外にもプレンクの著書としては、“Doctrina de morbis cutaneis.1776. ”、“Doctrina de morbis venereis. 1779. ” 、“ Elementa medicinae et chirurgiae forensis. 1781. ” などが知られている。

プレンクは基本的にラテン語で著述し、英語、ドイツ語、フランス語、オランダ語、イタリア語、そしてスペイン語などに翻訳され、人気を博した一方で、プレンクの著述がわかりやすく簡易に表現したことにより医学教育を浅くしたとする批判もあった。

オランダ・ハーグ国立中央文書館所蔵の日本関係文書によると、プレンクの蘭医書の長崎への舶載は、1817（文化 14）年の入港蘭船（フラウ・アハタ Vrouw Agatha 号、

中立国傭船）の積荷物リストにみえ、長崎奉行牧野大和守の正式な注文に応じて対応されたのが初見と考えられる。それ以降の蘭船の積荷リストにもプレンクの著書は注文に応じて多数もたらされている。宇田川玄真が手に入れた“Doctrina de morbis oculorum.” 1777. は、寛政６（1994）年オランダ商館長ヘンミーの江戸参府に随行した外科医ケラーが所持していたものを、幕府奥医師で蘭方医の桂川甫周が所望し、大槻玄沢の手許にあったものを筆写した写本から翻訳したものであった。

● プレンク『眼科書』の翻訳書

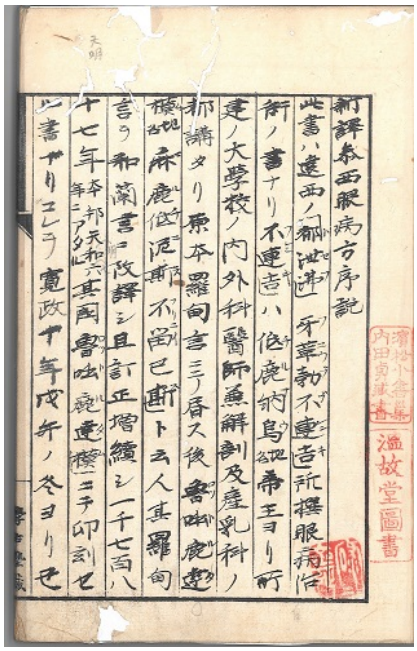
３１．宇田川玄真訳『泰西眼科全書』

今回展示する本書は、宇田川玄真がプレンクのラテン語医書『眼科書』(“ Doctrina de morbis oculorum.1777.”今回展示）の蘭訳版を用いて翻訳した『泰西眼科全書』である。蘭訳書名は、“ Verhandeling over de Oogziekten. Door den Heer Joseph Jacob Plenck. Uit het Latyn vertaeld, en met aenteekeningen vermeerderd. Door Martinus Pruys. Rotterdam, 1787.” 全 276 頁で縦 20.5 ㎝・横 14.7 ㎝の蘭書であり、書名からもわかるようにラテン語版からマルチヌス・プロイス Martinus Pruys がオランダ語訳したものである。プロイスは蘭訳にあたって 1783 年刊行の第２版を用いた。現在、この蘭書の筆写本が静嘉堂文庫の大槻文庫『宇氏秘笈』の書名で所蔵されている。プロイスの蘭訳本は、これまで寛政６（1794）年の輸入とされてきたが、オランダ・ハーグ国立中央文書館の日本関係文書中の同年入港蘭船の積荷リストには同書名がみえない。

この蘭書の入手経緯に関しては、『泰西眼科全書』の冒頭の「新譯泰西眼病方序記」・「余録」、大槻玄沢「解悶雑記」において玄真や大槻が詳しく述べている。それによると、寛政６年にオランダ商館長ヘンミーMr. Gijsbert Hemmij の江戸参府に随行した外科医のケラーAmbrosius Lodovicus Bernardus Keller が所持していたプレンクの蘭書を、桂川甫周と大槻玄沢が閲覧し、それが発端で所望するところになったとある。そのことは「西賓対晤」（静嘉堂文庫の大槻文庫所蔵）中の「甲寅来貢西客對話」の同年５月

４日の条に「(前略) 医書二三冊ヲ携来リ示スヲ見ルニ（中略）眼科ノ書アリ。名ヲ Oogzieken Door Den Joseph Jacob Plenck. トアリ、一巻ノ小冊ナレトモ療術薬方等載セテ詳ナリト見ユ」とある。玄真は『泰西眼科全書』の冒頭を寛政 11（1799）年３月晦日に記載し、その中で大槻玄沢はかつて仙台の大森寿安から眼科書の購入依頼を受けていたことから、ケラー所持の眼科書の購入を強く希望した。しかし、ケラーが示した書籍価格が「金二両」という高価であったためを入手を果たせず、ケラーは長崎の帰途についてしまった。同年秋に、阿蘭陀通詞を介して桂川甫周が所望したところ、ケラーからプレンクの眼科書が届き、それを桂川が大槻に預けるところとなった。大槻はそれを大森寿安に購求させようと図ったが、大森がこれを欲しがらず拒否したため、そのまま大槻のもとで所持していた。その後、大槻は杉田伯玄が来訪した折にその蘭書の借用を迫られたので貸したところ、杉田玄白の門人で小田原藩医の市川隆甫が眼科を専門としている関係でその蘭書を所望したので、大槻が桂川にこの話を取り次ぎ、ここに市川の購入が実現するところとなった。その後市川は、宇田川玄随の塾でこの書の翻訳に取り掛かっていたが果たせず、小田原に帰藩するところとなった。この時、すでに玄随は市川所持の蘭書の謄写を玄真に命じて作成させ、家蔵していた。

玄真は寛政９（1797）年に義父玄随が没したので、遺志を継いで翌寛政 10（1798）年冬より訳業に着手し翌年春に訳了して全５巻にまとめた。玄真はこの訳業について自ら「我邦ニテ眼科書新譯ノ権輿ナリ」と記載している。



玄真の翻訳は訳了したものの版本として刊行されなかった。玄真は２冊の書写本を作成して、杉田玄白と大槻玄沢の２人に贈呈した。すなわち、この訳書は玄真自身のものを含めると３部のみ作成された珍蔵書であった。ましてや大槻家秘蔵本は玄沢自ら余録として序文的な付記を添えていた。中泉行正博士の調査によれば、千葉大学と京都大学に同写本が所蔵されていることを確認したが、いずれも完本でないことが判明したと報告している。

本館が所蔵する『泰西眼科全書』は、玄真が訳し

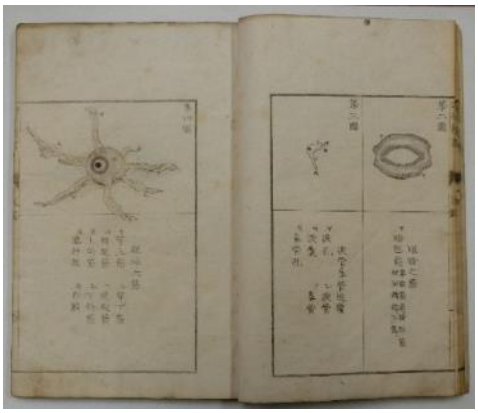
て版本にならずに写本として流布したものであり、杉田と大槻の両名のみに秘かに贈呈された書写本からの写本で、５冊から成る完本である。加えて、大槻の余録を伴うものであり、他の所蔵が確認されない現在のところ貴重な史料であり、まさに今回の見どころの一つでもある。この第１巻の表紙裏には、書肆の和泉屋が『泰西眼科全書』５冊を金 1 歩１朱で「足立様」（蘭方医の足立長雋と考えられる）宛に送付した「覚」が付されていて、その後浜松の内田正と鮫島近二の所蔵を経て、現在、本館の所蔵に帰しているものである。全５巻の写本で、縦 25.3 ㎝・横 17.5 ㎝である。

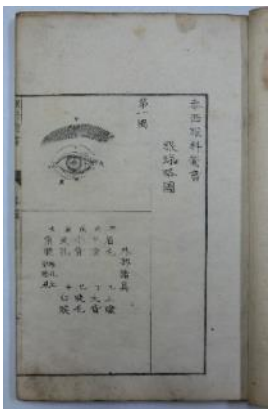
３２．杉田 立卿（すぎたりゅうけい） 訳『和蘭眼科新書（おらんだがんかしんしょ）』・『眼科新書（がんかしんしょ）』

今回展示する本書は、宇田川玄真がプレンクのラテン語医書『眼科書』(“ Doctrina de morbis oculorum. 1777.” 今回展示）の蘭訳版を用いて翻訳した『泰西眼科全書』が未刊であったため、杉田玄白の子である杉田立卿が文化 12（1815）年に完訳して最初『和蘭眼科新書』として刊行し、同年『眼科新書』と改めて出版したものである。

『和蘭眼科新書』は、第１巻に杉田立卿の序があり、途中に石川大浪が描いた「眼球畧図」が彩色されて挿入され、そして第５巻の末には大槻玄沢の跋がみえ、巻尾に「天真楼蔵版」と杉田家の塾名の版であることが明記されている。本書は全５巻版本で、縦 26.0 ㎝・横 17.3 ㎝である。

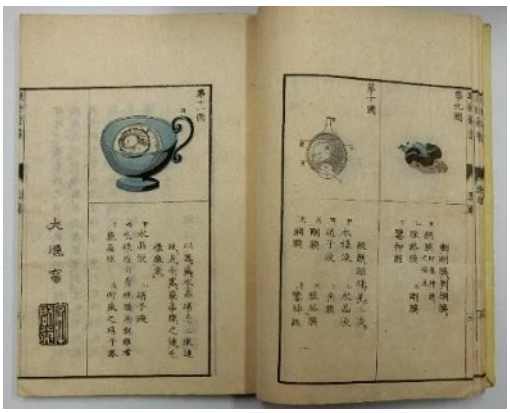
『眼科新書』は、第１巻の冒頭に大槻玄沢の跋、続いて杉田立卿の序の順で編集さ

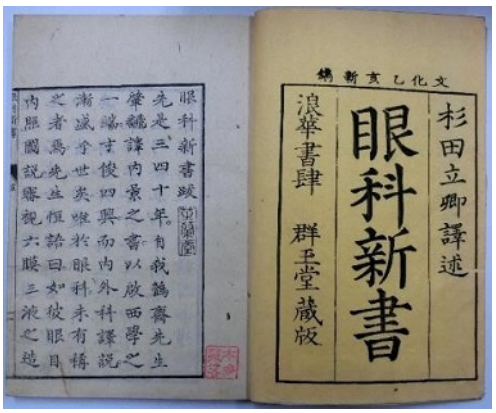


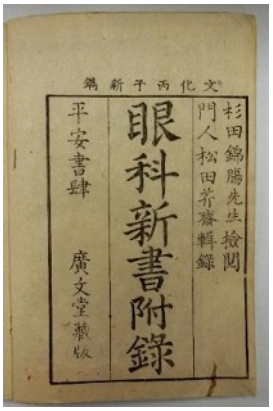


れ、全５巻で、本文は『和蘭眼科新書』と同様であるが、図だけが一部異なっている。また、この５巻に、松田就将輯録『眼科新書附録』全１巻が加えられて完本となっている。この附録には、製煉器図説や薬剤製煉法などの内容がみえ、巻首には岩松良碩義則の跋がある。

本書の特性は、「眼球畧図」が挿入されていることで、オランダ語を理解しなくても、その図から西洋の眼科の知識や医術を習得できる点であった。また、本書の刊行をめぐって、同年中に異なる版が出され、序・跋の順が入れ替えられたように、ここに大槻玄沢の関与を物語っているとされる。本書は、附録を加えて全６巻の版本で、縦 25.3 cm・横 17.5 cmである。







３３．　イペイの蘭書

アドルフォス・イペイ　Adolphis（Adolphus）Ypey（1749-1820 年）

イペイは、1749 年６月 14 日オランダのフラネッケル大学の数学教授であったニコラース・イペイ Nicolaas Ypey の子として、同地で生まれた。1762 年にフラネッケル大学の哲学部・医学部に入学し、1767 年４月９日に哲学博士、1769 年に医学博士の称号を取得した。卒業後、同地の開業医となったが、1772 年 10 月 30 日オーウェンス Owens の後任としてフラネッケル大学の植物学の講師となり、また自らの願い出により 1776 年１月 20 日には医学の講師にも任命された。

1787 年 10 月 27 日に父親の死去で、数学、築城術、内科学及び解剖学の教授に任命された。1793 年には同大学の学長に就任し、同年から 1795 年の期間には５体の公開解剖を実施した。

1795 年７月 10 日、ナポレオンがオランダを侵略したことで、イペイは政治的な理由をもって職務を辞し、1797 年にはアムステルダムに転居して開業医として暮らした。1805 年、アラルディ Allardi の後任としてフラネッケル大学に復職して教授に戻り、病理学、疾病分類学、薬学、内科臨床学の講義を担当した。その後、フラネッケル大学はナポレオンによって閉鎖されたのを機に、イペイはライデン大学に転勤し、1813 年１月 18 日化学の授業を開講し、その後 1815 年 10 月 16 日まで教授として務めた。1820 年２月 27 日、イペイはライデンにおいて 70 歳で没した。

イペイの学問領域は多岐にわたり、書物を介して広い知識を獲得し、優れた教科書を多く執筆した。イペイの肖像銅版画は、ポートマン L.Portman によつて描かれた。

イペイの著書としては、“Chemie voor Beginnede Liefhebbers.” Amsterdam.1803.が有名である。これは、ウィリアム・ヘンリーWilliam Henry の “Elements of experimental chemistry” の Trommsdorff のドイツ語版の重訳とされてきたが、近年の研究成果により、ウィリアム・ヘンリーによる『化学概略』“An Epitome of Chemistry.”1801. を翻訳した

ことであることが判明した。このイペイの化学書は、わが国では宇田川榕庵訳の『舎密開宗』（1837（天保８）年刊行）の主著となり、化学の基礎的な教科書として扱われた。「舎密」とはセイミと称し、オランダ語の Chemie であり、つまり化学の音訳であった。しかし、『舎密開宗』は、イペイの著書のみならず 24 冊の化学書を参考に著述され、わが国の化学導入に大きな影響を及ぼした。また、イペイ著 “Handleiding tot de Physiologie.”Amsterdam.1809. は、広瀬元恭訳『知生論』の原著とし、イペイ著 “Handboek der Materies Medica.” Amsterdam.1811. の初版本は、藤林普山訳の『和蘭薬性弁』（５冊８巻で未完）の原著であった。

今回展示するイペイの “Handboek der Materies Medica.” は、1818 年にアムステルダムで刊行された第 2 版であり、これを用いて青地林宗が翻訳したのが『依百乙薬性論』であり、凡例に文政６（1823）年の識語あることから、同年の訳稿と考えられる。本書は国立国会図書館の江戸幕府旧蔵蘭書中にも他館等にも所蔵が確認できない。本館所蔵本はその意味でも貴重書であり、わが国における西洋の内科学・薬物学の導入・普及に多大な影響を及ぼした蘭書であるといえる。

オランダ・ハーグ国立中央文書館所蔵の日本関係文書（貿易書類）によると、イペイの蘭書のうち、『依百乙薬性論』の原書 “Handboek der Materies Medica.” の長崎への舶載は、1821（文政４）年の入港蘭船（ジャワ Java 号）の積荷リストにみえ、1818（文政元）年以来毎年の阿蘭陀通詞による誂物注文に応えたものである。これを機に、それ以降もイペイの同書の注文・舶載は人気を博して継続された。

もう一つ、イペイの蘭書の中で、宇田川榕庵が『舎密開宗』編述の主著とした、いわゆる「シーケイキュンデ」は、近世後期のわが国にもたらされた蘭書の中でも大量に発注され舶載された一書であり、そのことは日本関係文書（貿易書類）からもうかがえる。1819（文政２）年に阿蘭陀通詞が誂物として１部３巻本のものを注文している記録が初見であるが、舶載の最初は、1825（文政８）年長崎入港のヴァスコ・ダ・ガマ Vasco da Gama 号が、次に示す１部９巻本の蘭書として舶載したことに求められる。

“Systematisch handboek der beschouwende en werkdadige scheikunde, ingericht volgens de leiddraad der chemie voor beginnende liefhebbers door W. Henry.” Amsterdam. 1804-1812. 9 vols.

同書は、1826 年と 1827 年の各年に５セットずつ再注文されているが、長崎に入港する蘭船にはしばらく積み渡られず、再度の舶載は 1831（天保２）年入港のデ・ヨン

ゲ・ヤン De Jonge Jan 号が１部９巻本を舶載した。これ以降、引き続き大部の発注を出し、天保・弘化・嘉永年間まで、ほぼ毎年舶載され、１部９巻本の圧巻の蘭書であったが長い期間にわたり人気の蘭書であったことがうかがえる。

● イペイ蘭書の翻訳書

３４．廣瀬元 恭（ひろせげんきょう） 訳『知生論（ちせいろん）』

今回展示する本書は、イペイの『人体生理学要綱』（Adolph Ypey: Elementa Physiologiae Humani Corporis. 1809.”）の原書を、廣瀬元恭が翻訳し、時習館で講義したのを、備前の門人で適塾にも学んだ長湍元蔵（長瀬時衡）が筆記し、雲藩の宍道精新斎が校訂し、時習館蔵版として安政３（1856）年に刊行したものである。当初３巻本を予定していたが最終巻は未刊に終わり、本館本もそれによって２巻本として所蔵されている。本書は縦 22.0 ㎝・横 14.5 ㎝で、「金澤藩」「金澤学校」の蔵書印記がみえる。本書の内容は、近代生理学を大成したハーラーAlbrecht von Haller による筋に関する刺激性説と神経に関する感受性説を紹介したもので、殊にハーラーの顕微鏡による毛細血管内の血液の流動の観察が記載されている点に注目できる。

廣瀬元恭は、文政４（1821）年に甲斐国藤田で代々医術を生業にする家系に生まれた。15 歳で江戸の坪井誠軒に入門し、安政３（1857）年には大坂の緒方洪庵の適塾に入門してオランダ語を学習した。京都に落ち着いて時習館という家塾を開き、佐野常民や陸奥宗光などのも門人を教えた。廣瀬の塾では医学のみならず、砲術や軍制にも及んでいて、蘭学の西洋軍事科学化の様相に対応した代表的な蘭学者である点も看過できない。著訳書も医書から軍事科学書など多岐にわたり、『知生論』のほか、『理学提要』、『病理正解』、『築城新法』、『砲術新書』などがある。

３５．藤林普山（ふじばやしふざん） 訳『和蘭 薬性 弁（おらんだやくしょうべん）』

今回展示する本書は、イペイの『薬性論書』（“Handboek der Materies Medica.” Amsterdam. 1811.）の原書を、初編８巻全５冊として文政８（1825）年に鼓岡館蔵版として刊行したものである。外題に「和蘭」の角書があり、正式書名は『薬性弁』であるが、一般的には「和蘭」を冠した書名が通行名となっている。全５冊で、縦 26.0 ㎝・横 18.0 ㎝で漢字片仮名交文である。第１巻には、新宮凉庭参、中川修亭・近藤一進・山内競校、そして文政５（1822）年の新宮凉庭の序、近藤一進の題言がある。この目次には、全 22 巻が紹介され、奥付には「初篇五冊、二篇・三篇嗣出」とあるが他は未刊に終わった。イペイの原書に薬方名が記載されていながら、薬方内容が記載されていないものはバタビア局方とショメールの辞典に依拠し補記している。

藤林普山は、天明元（1781）年に山城邦綴喜郡普賢寺村水取に生まれた。寛政８（1796）年に京に出て３年間医術を学び、稲村三伯の『波留麻和解』を購入して帰郷し、独学で 10 年間オランダ語や西洋文物の学習を行った。文化３（1806）年５月に親友の小森桃塢とともに海上随鷗（稲村三伯から改名）の塾に入門した。『波留麻和解』が７万語・出版 30 部であったことから、小森と相談し重要用語３万語を選び、師に乞うて『譯鍵』として文化７（1810）年に出版。その冒頭に掲載した「凡例附録」ではオランダ語文法を略説し、これはのちに『蘭学逕』として出版した。文政７（1824）年に門人により 100 部再販し、さらに安政４（1857）年に越前の大野藩の廣田憲寛が『増補譯鍵』として出版した。その後藤林は翻訳に専念したが、天保元（1830）年には有栖川宮家の医員を務めるようになった。天保７（1836）年１月 14 日、56 歳で没し、黒谷金戒光明寺に埋葬された。

３６．青地林宗（あおちりんそう） 訳『依百乙（イペイ） 薬性論（やくせいろん）』

今回展示する本書は、イペイの『薬性論書』（“Handboek der Materies Medica.” Amsterdam. 1818.）第２版を原書に、青地林宗が訳出して刊行したものである。藤林普山の『和蘭薬性弁』が８巻全５冊で未完に終わったのに対して、本書は完訳本である。

本書の凡例に文政６（1823）年仲春の青地林宗の識語がみえることから、同年に脱稿したものと考えられる。本書は版本にはならず写本として流布し、本館の所蔵本は３冊で、縦 23.5 ㎝・横 16.5 ㎝のものである。

青地林宗は、安永４（1775）年に伊予松山藩の侍医快庵の子として生まれた。蘭学を学んだ経緯は詳しくわからないが、蘭学の師についても馬場佐十郎と杉田玄白の天真楼と 2 つの説がある。青地は窮理学すなわち物理学をよく研究し、文政８（1825）年に『気海観瀾』を著し、また馬場佐十郎の遺志を継いでロシア人ゴローニンの『遭厄日本紀事』の翻訳も行った。そのほか、文政９（1826）年に『輿地誌略』、同 11（1828）年に『医学集成』を著した。またこの頃に、幕府による『厚生新編』の翻訳にも携わったとされる。天保４（1833）年２月 22 日、青地は江戸の本所で没した。

３７．　ボイスの蘭書

エグベルト・ボイス　Egbert Buys（？-1769 年）

ボイスは、生年月日が不明であり、プロイセン王の宮廷顧問を務め、生涯の大半をアムステルダムで過ごしたと伝わるがそれ以外の経歴は不明であり、1769 年２月 13 日に同地で没したことはわかっている。

ボイスには次の単行本４冊と２種の辞典の著作がある。

①“Den Algemeenen Spectator, zijnde 30 Vertogen over verscheyde onderwerpen, vercierd met een Register der voornaamste zaken.” Amsterdam. 1749.

②“Naauwkeurige en volledige beschryving van den laatsten Oorlog in Duitschland, Portugal, Oostindien en Amerika.” 's Hage.

③“De Weereld in het klein of de spoedige Reiziger. ”tweede druk 's Hage 1770.

④“Historie van het Huis van Brunswijk. ” Amsterdam.

⑤“Volkomen Kunstwoordenboek, bevattende eene genoegzame verklaring van alle woorden, ontleend van de Grieksche, Spaansche, Fransche, Hoogduitsche en Nederduitsche Talen, die men gebruikt om eenige Konst, Wetenschap, Gewoonten, Ziekten, Geneesmiddel, Plant, Bloem, Vrugt, Gereedschap, Werktuig enz. te benoemen. Utr.” 1768. 2 deelen.

⑥“Nieuw en volkomen Woordenboek van Konsten en Wetenschappen.” Amsterdam. 10 deelen. 1769-1778.

今回展示するボイスの上記⑥の辞典は、『ボイス学芸辞典』として知られ、10 巻の大部である。ボイスの本書 10 巻は、蘭癖大名の朽木昌綱がオランダ商館長ティチング Isaac Titsingh から贈呈されたのが、わが国に将来された初見といえる。オランダ・ハーグ国立中央文書館所蔵の日本関係文書（貿易書類）によると、ボイスの本書 10 巻はその後、寛政３（1791）年の入港蘭船フーデ・トラウ Goede Trouw 号が将軍家の注文として舶載している。それ以降も阿蘭陀通詞による誂物注文として求められ、大量に発注され舶載された一書となったことが日本関係文書（貿易書類）からもうかがえる。概ね１巻 200 頁を超える大著で、縦 23.3 ㎝・横 14.0 ㎝で 10 巻揃いであり、国立国会図書館をはじめ佐賀県の武雄鍋島家などに所蔵されているが、欠本所蔵のところも少なくない。当時の蘭学者は、さまざまな学問分野においてこの辞典を紐解いており、同辞典掲載図は必要に応じて筆写され、例えば、川本幸民訳の『気海観瀾広義』の挿図にも参考に用いられたことがうかがえる。なお、ボイスの名前については、オランダの科学者で窮理学の大家であるヨハネス・ボイス Johannes Buys（1764-1838）とエグベルト・ボイスとが歴史的に混同されてきたところもある。ヨハネス・ボイスは、著書に“Natuurkundig schoolbook, uitgegeven door de Maatschappij: tot nut van’s Algemeen.” 1828.があり、これがわが国にも舶載され、青地林宗『気海観瀾』、帆足万里『窮理通』、川本幸民『気海観瀾広義』の参考書として使用された。

３８．気海観瀾　　青地林宗：訳

３９．気海観瀾広義　　川本幸民：著

資料解題の参考文献　（梶　担当分）

1　Van der Aa, A.J., “Biographisch woordenboek der Nederlanden”, t.8. 2e partie, Haarlem: J.J. van Brederode.1867.
2　オランダ・ハーグ国立中央文書館所蔵「日本関係文書」
3　大槻如電著・佐藤栄七増訂『日本洋学編年史』
4　日本学士院『明治前日本医学史』
5　日蘭学会編『洋学史事典』
6　石田純郎『オランダにおける蘭学医書の形成』
7　石田純郎『蘭学の背景』
8　石田純郎「プレンク（J. J.E.von Plenck）について」（『日本医史学雑誌』第45 巻第２巻）
9　片桐一男『杉田玄白　蘭学事始』
10　梶　輝行「『泰西眼科全書』の成立をめぐる蘭学者の交流について」（『医薬科学史研究』第１号）